

平成28年度学内版 GP 成果報告書

取組名称	講義とフィールドつなげたアクティブラーニングの促進 ー農学の意義と可能性を見出す、農業・農村実地研修ー
実施組織 (または対象のカリキュラム)	農学部
※連携する他学部・機関がある場合は記入	インドネシア国立ジャンビ大学畜産学部、 バングラデシュ国立バングラデシュ農業大学
実施責任者(所属)	浜野 充 (農学部国際農学教育研究センター)
取組の目標	1. 日本と海外の農業のグローバル課題に関する理解 2. 農学に取り組むための主体的学修意識の醸成 3. コミュニケーション能力の向上
1. 目標達成のために 行った活動と成果 (箇条書きで項目ごとに 番号を付けて記載。成果 の詳細は必要に応じて別 添とする)	1. 活動内容 本プログラムでは、インドネシア・ジャンビ大学から4名(8月)、バングラデシュ農業大学(BAU)から3名(10月)の学生を招聘し、信大農学部の学生12名(2年～4年生、修士課程)が共に農学部の講義や研究室での専攻演習、長野県内での研究／教育フィールド、食品産業／農村地域での視察・インタビュー・農家民泊体験を実施し、地域の農業および海外の農業に関する学生同士のディスカッション・発表を実施した。 1ー1. インドネシア・ジャンビ大学(UNJA)と本学学生による Summer Study Program on Agriculture and Agro-industry in Japan (1) 開催時期：2016年8月5日～8月9日 (2) 招聘学生：ジャンビ大学・畜産学部3年生4名 (3) 内容(下記活動のコミュニケーションは、すべて英語) ● 本学部生による長野県の農業・農産加工業・畜産業・林業紹介 ● 本学の動物栄養学の博士課程・修士課程学生による研究紹介 ● 農学部オープンキャンパスでの研究室訪問(8月6日) ● 研究フィールド訪問(高遠：耕作放棄地対策として羊の放牧) ● 附属アルプス圏フィールド科学教育研究センター(AFC)野辺山ステーションでの農場実習、共同調理、ハケ岳白菜農家・JA長野ハケ岳集荷施設視察 ● 長野県内の食品加工業視察：タケヤ味噌工場(諏訪)、養命酒工場(駒ヶ根) ● ディスカッション・プレゼンテーション：プログラムでの学び、日本とインドネシア、ベトナム(信大正規留学生)の農業・農産物加工業の現状や課題点比較 1ー2. バングラデシュ国立農業大学(BAU)畜産学部学生との、Autumn Short Course on Animal Science in Shinshu, 2016 (1) 開催時期：2016年11月7日～11月17日 (2) 招聘学生：BAU学生畜産学科4年生3名

(3) 内容

- 伊那市長谷地区での農家民泊および農家視察・ヒアリング
- ディスカッションおよびレポート作成：中山間地における農業・農村の現状から学んだこと。
- 農学部講義・専攻演習への参加：国際農学概論、飼料学、動物生産システム実習、動物資源生産学特論Ⅱ、専攻演習
- 国際農学概論（学部生約 170 人）におけるバングラデシュ農業および社会・文化・歴史の紹介

2. 成果：

(1) 参加学生の主体的な学修・研究への導きについて

- UNJA と BAU の招聘学生と本学部生がともに農学部の講義・実習（野辺山 AFC）の受講、長野県内の農業・農産物加工業の現場視察、農家民泊・ヒアリングを行い、国内外の農業・農村課題についてディスカッションを行うことで、日本の農業・農村の課題や魅力についてより具体的にイメージしながら理解を深めるとともに、海外の農業についても興味を持つことができた。
- 学生同士のコミュニケーションを促進することで、参加者は海外の農業にも目を向け学びたいという意欲を持ち、海外の人々との交流そのものに積極的に取り組む姿勢が醸成された。

(2) プログラムが学生の学修・研究の取り組みに与えた影響

本プログラムへの参加をきっかけにして、積極的に海外に飛び出し経験を積むことで、学修・研究活動のフィールドをグローバルに広げつつ、ローカルな課題に取り組む意識と行動力が涵養されていると評価できる。

本プログラムに参加した信州大学農学部生 12 名のうち、9 名が学部生（2 年～4 年生）で、3 名が修士課程学生（留学生・留学経験者）であった。本プログラム参加後の学部生の学修・研究の取り組みについてフォローアップ調査を行った結果、ほとんどの学生が以下のように海外での実習・調査や留学に取り組んだ。

- 海外農学実習への参加：ネパール（平成 28 年 9 月）3 名、カンボジア（平成 29 年 2 月）5 名（内 2 名はネパール実習にも参加）
- 海外での農村調査の実施（専攻研究）：カンボジア 1 名（4 年生：農村での養豚業経営調査実施）、ネパール 1 名（3 年生：山間地域の生計の基礎調査実施）、モンゴル 1 名（3 年生：森林調査実施予定）
- 日本の農村課題について農村調査実施（専攻研究）：1 名（4 年生）、2 名（3 年生：集落営農、地産地消に関する基礎調査）
- グローバル教育推進センター事業による交換留学への応募：1 名（2 年生：2017 年度にオーストラリア留学が決定）
- ベトナムでの国際シンポジウム参加および専攻研究のための予備調査を実施：1 名（3 年生）

(3) 本プログラムを実施することによる、周辺学生への影響

BAU 学生の招聘時期は学期期間中であったため、動物コースの各研究室での専攻演習への参加や、2 年生を中心に 170 人以上が受講する国際農学概論

	でのプレゼンの実施、English Salon への参加を通じて多くの農学部生と交流を深めた。国際農学概論では、同世代の BAU の学生が自国の社会・文化・農業について流暢な英語で堂々とプレゼンを行う姿は、本学部生にとって大きな刺激になり、英語での活発な質疑応答が行われた。 (4) 国際通用性のある講義方法の試行と検討機会の提供 THE による世界大学ランキング日本版では、信州大学は国際性（留学生・外国人教員の割合）の部分で評価が低い。本学部が教育・研究の国際化を推進するためには、英語対応による授業方法を検討し国際通用性のある教育体制を構築することが急務である。そこで、BAU 学生を招聘した本プログラムにおいて、英語を取り入れた授業を実施し、信州大学学生の授業理解度と英語による授業に対する意欲を調査した（添付資料）。調査結果の一部ではあるが、意欲に関して、今後も英語による授業（一部英語による授業）を受講したいか？という質問に対して、グローバル科目であり 2 年生が主体の国際農学概論で 35%（N=160）、専門科目であり 3 年生が主体の飼料学で 34%（N=58）の学生が、受講に対して意欲的であった。これに「どちらでもよい」という学生を加えると（すなわち英語による授業を忌避しない学生）、国際農学概論が 76%、飼料学が 66%になった。これらの結果は、グローバル化を見据えた教育の国際化に対する学生のニーズが確実に存在すること、また英語対応の授業を積極的に推進できる可能性を示唆している。	
2. 目標達成度に関わる所見と今後の展望 （達成の度合いを選び、そう評価する理由と今後の展望を記述）	a. 達成できた ⑥ おおよそ達成できた c. 半ば達成できた d. おおよそ達成できなかった e. 達成できなかった	（そう評価する理由） 本プログラムの参加者のほとんどが、海外農学実習への参加や国内外での課題解決型研究のための調査・研究の実施、長期間の海外留学等に挑戦している。本プログラムにより、日本の農業・農村課題に対する理解を深めるとともに、海外の留学生との交流・意見交換によって海外の農業や社会・文化への興味やコミュニケーション力向上の必要性の認識が高まった。これらの意識の高まりは、学生が海外に出るという積極的・主体的な学修行動の涵養につながっていると評価できる。 （今後の展望） 本取り組みを継続することで、学生の主体性を涵養すると共に、本学が掲げる基本方針の三つの G と L のうち、Global と Literacy の推進に大きく貢献すると考えられる。 試行的に実施した本プログラムに引き続き、平成 29 年度も学内版 GP によるプログラムを継続させて頂く計画である。本学部学生の参加人数や海外協定交学生の受入人数を増やした形で取り組みを進めるとともに、農学部の体系的なカリキュラムの一部としての継続的な導入について方法を検討していきたい。同時に、留学生を招聘する本プログラムにおいて、連携教員の数を増やすことで、国際通用性のある授業方法の検討と試行の機会を増やしたいと考える。